

恐怖！ 迫る呪詛と踊り狂う白い男！

仙台コミュニケーションアート専門学校
クリエイティブコミュニケーション科
ライトノベル・小説作家専攻
三年
吉田達弥

「あつー……なんだこの日差し」

強烈な日差しが、遮るもののない平坦な道に降り注ぐ。辺り一面が田んぼで覆われた田舎道を、一人の青年が歩いていた。

その服装は、一言で表せば、奇妙。白い帽子、白いシャツの下には白いTシャツ、足元は白いパンツに白いスニーカー。とにもかくにも真っ白な彼は、これまた真っ白なビジネスバッグを右手に抱え、白いハンカチで首筋を拭いながら進んで行く。

「日本もそろそろ終わりかねえ……地球温暖化、お前も俺らの仲間かと思ってたんだがな……」

ぱたぱたと手をうちわのようにして顔に向け、仰ぎながらのんびりと道を進んで行く。

途中、妙に古風な、着物姿の小さな少女が横を駆けて行こうとして、立ち止まって彼に笑顔を見せる。

「おはようございまーす！」

「おう、朝から元気だねえ」

「くねくねさんは今からお仕事？」

「そうだ。これから会社にね。君はこれから友達と遊ぶのかな？」

「うん！」

「転ばんように気を付けるんだぞー」

「はい！ くねくねさんも気を付けてね！」

「俺の身体能力舐めんじゃねーよ。んじゃーな」

少女のおかっぱ頭にぽん、と手を置いて、くねくね、と呼ばれた青年は再び道を進み始めた。

向かう先は、駅。こんな田舎でも電車が通っているのはありがたいことだ、と彼はのんびりと考えていた。コンクリートなんて使われていない、舗装されていない砂利道でそんなことを思うのも、どこかおかしい感じがしないでもないが。

やがて、彼がたどり着いた駅には『きさらぎ駅』という錆びた看板が立てられていた。駅員はなし。切符を買って、無造作に放置されている鋏で切符を切り、乗り場に入っていく。

電車は一日に数本しかない。ホームには誰もおらず、彼は一人、ベンチに腰かけて帽子を脱ぎ、額の汗をぬぐった。帽子の下にあった短めの髪は、これも一緒、真っ白だ。

「まったく、そろそろ俺たちの季節だなあ、とか数日前まで思ってた自分が憎らしい……まだ六月だぜ？ 俺らだってこんな暑さはごめんだっつもの。断固拒否だ、クソが。いちいちこんな暑い思いするぐらいなら、俺は別のやつに生まれたかったね。田んぼのど真ん中に突っ立って、誰かに見られるのを待つ。それだけの仕事にやりがいなんてのは感じられないわけよ。だが今は違う。オフィスでのうのうとできる。素晴らしい時代だぜ、まったく。だがそのうち俺も外回りがまた回ってくることだろう。それが夏の後であることを願うが……俺の話ってたいい夏休みなんだよなあ。どう思うよ、きさらぎ駅さん？」

天井をあおぐようにして、背もたれに手を伸ばしながら、彼は静かにそう告げた。

しかし、誰も答えない。無人の駅に、外から風が入ってきて吹き抜けていくだけだ。

それに彼は苦笑を浮かべ、再び正面を向いた。

「話し相手がいないってのも、なかなか辛いねえ。普段がだんまりなせいで、ついつい喋り過ぎちまう。さて、とつとどこねえかな、電車」

ひとりごちながら、くねくねは電車を待つ。暑さに対抗する手段は特になく、ひたすら彼の体を汗で濡らしていただけだった。

腕時計で時間を確認、もうすぐ来るはずだ。

そんなことを線路に視線を向けながら考えていると、ちょうど、少し離れた場所にあるトンネルの向こう側から電車がやってきていた。

その先頭の運転席には、誰も乗っていないように見える。だが、それはいつものことだ。

停車した電車からはアナウンスすら聞こえてこず、くねくねはそれに躊躇することなく、悠々と入って行った。

車内は冷房が効いていた。他に客はおらず、利用者はくねくねただ一人である。

「やれやれ、やっと一息つけるぜ」

そんなことを呟いて、どっかりと席に腰を下ろす。他に利用者がいないのをこれ幸い、と自分の真横にバッグを置いて、足を組む。

「さて、遅刻はないな。余裕の会社だ。今日は何やらせられっかね。昨日の話だと俺は今日から新しい仕事らしいし……ま、八尺が足引っ張らなきゃ大丈夫だろ」

ぶつぶつと、ここでも彼は独り言を呟いていた。

それに応えるものは当然おらず、電車は扉を閉め、静かに線路の上を進んで行く。窓の外を流れていく景色は、見事なまでに田舎そのもの、といった感じだった。

何もない、ひたすら田んぼと畑が広がっているだけの景色。時折ぽつん、と民家が建ってはいるものの、人影はさっぱり見当たらない。

やがて、そんな景色もトンネルの中に入ること、闇に包まれてしまう。

真っ暗な中を、淡々と電車は進んで行った。他に人の気配のしない三連車両は、黙々とくねくねを運んで進んで行く。

やがて、電車はトンネルの中を抜けることなく、唐突に止まった。

くねくねが慣れた様子で降りると、そこには簡易的な駅のようなものがあり、『乗車券はこちらにお入れください』と書かれた細長い箱がぼつん、と置かれていた。

「はいよっと」

切符を適当に箱に放り込んで、去っていく電車と逆方向にくねくねは歩き出した。

コンクリートで固められた階段を下りて、道とも言えないような道をのんびりと歩いて行く。足元は若干だがぬかるんでいた。スニーカーに汚れがつかないように、気を付けて、でも仕事場に向かうのでそれなりに早足で。

やがて太陽の下に出たところで、くねくねは目元を隠すように額に手を水平に当て、めんどくさそうに呟いた。

「こっちに来て日差しは変わらず、か。やれやれ。まだまだ夏本番にや早いっつーのに。俺らをどうしたいんですかね、お天道様は」

困ったもんだ、とでも言いたげに、彼は首を左右に振りながら道を歩き出す。

トンネルから繋がっていたのは、立ち入り禁止のフェンスが設けられた私有地だった。私有地と言っても、再開発の予定はゼロ。何しろこの場所の持ち主が、ここはこれでいい、こういう場所だとしているのだから。

くねくねはフェンスに歩み寄って、ポケットから鍵を取り出すと、出入口に着けられていた南京錠に差し込んでそれを外した。私有地から外に出て、外した時とは鍵穴のついた方が逆になるよう、南京錠を付け直す。

この私有地からきさらぎ駅に出入りできるのはくねくねただ一人だ。そもそも普段から利用者が少ないため、そうそう出入口がたくさん必要になることはない。

「しかし、不思議な駅だよなあ……俺が言うのもなんだけどよ」

ヒヒヒ、と笑い声をあげて、くねくねは私有地から離れて行った。

そして歩いて五分ほど後。

たどり着いたのは、彼が勤務している会社のビルだった。

看板には『鹿島乳業』と書かれている。ビルの横には工場も存在し、そちらからはトラックが何台も出入りしていた。

わりと真新しい感じの、五階建てのビル。ここに入社して、もう何年になるだろうか。最近仕事も落ち着いてきて、一時期の忙しさが嘘のようだった。

ただ、若干需要も上がってきている。ネットという文化が広まれば広まるほど、彼らの仕事は複雑に、多くなっていく。

「はよぎっす」

ビル内に入り、受付の女性に軽く挨拶をしてから、エレベーターで三階へ。自分の所

属する部署には『マーガリン課』と書かれたプレートが張られていた。それをちらっと見ながら、くねくねはなんとなく、マーガリンは正しくは乳製品じゃないんだよなあ、なんてことを考えてしまう。昔は石油が原料なんて噂を流したやつもいたっけなあ、とか思い出したりもする。

タイムカードに出社時間を記入しながら声をかけると、オフィス内からまばらに返事が返ってきた。どうも、今日の暑さで誰もがやられてしまっているらしい。気だるそうな人ばかりだ。

「皆元気ねえなあ……ま、しゃーないか。外、滅茶苦茶暑いもんな。夏出身の俺だってやんなるっつの」

タイムカードを所定の位置に戻して、社員証を首からかける。『くねくね』と書かれた札をぶらぶらとさせながら、彼は設置されているコーヒーマシンでアイスコーヒを淹れ、ミルクとガムシロップを二つずつ入れた。

それに口をつけながら、自分の仕事机に向かおうとして、
「うーん……ぽぽぽ……はっ、う、うーん……」

口癖が若干出てしまっている、背の高い後輩が困っているのを見つけた。

つい立で仕切られた狭いスペースで机に向かい、頭を抱えている彼女に歩み寄る。

「何してんだ、八尺」

「あ、先輩。おはようございます」

立ち上がり、振り向いてペコリ、と頭を下げた彼女の身長は、恐ろしいほどに高かった。

実際、身長は二メートル四十センチあるらしい。天井近くまである頭がぶつかりそうだ。

長い黒髪に、真っ白な肌。やたらと高い身長にくせに、体つきはとてもスレンダー。まるでパリコレに出て来るような、モデル体型というやつだ。痩せ細っていて真っ白なくせに、身長があるせいでやたらと迫力がある。白いワンピースもいつも通り。

八尺様、と呼ばれる彼女は、顔を上げるとまっすぐにくねくねを見つめた。

身長差がずいぶんとあるくねくねとしては、あまり立って傍にいてほしくはない。

「あー立つな立つな。デカいんだよお前。俺の倍近くあるじゃねえか身長。半分よこせ」
ひらひらと手を振ってぶっきらぼうに言えば、彼女は困り顔で首を傾げた。

「半分でも小学生ぐらいの身長はあるんですが……足したいですか、まるっと、百二十センチ」

「冗談だよいらねえよ」

呆れ顔で答えれば、八尺様はにこにここと笑って頷き、やっとう椅子に座り直した。それでも、座高だけでだいたいくねくねと同じぐらいの目線になる。

「んで？ お前はうんうんぽぽぽぽ何を唸ってたんだ？」

隣に椅子を持ってきて座れば、彼女は何やら白紙にいろいろと書き込んでいた。転

がっていた鉛筆を拾って手先で器用に回しながら、くねくねはその中身を読み上げていく。

「新規性→新しい怖さとは？ 古典的事例、こんにやくを釣竿で……ってなんじゃこりや」

いったい全体何を始めたのか、と疑問に思っていると、

「新しい怖がらせの企画だよ、くねくね」

背後から声をかけられ、くねくねは首だけで後ろを振り向いた。

「口裂け姉さん。新しい企画？ なんすかそれ？」

背後に立っていたのは、一人の女性。八尺様ほどではないものの、こちらも高身長。パンツスーツを身に着け、上着は脱いで涼やかなYシャツ姿となっている。眼鏡をかけ、長い髪を後ろで一つにまとめた姿はどことなく涼やかではあるものの、なぜか大きな白いマスクをつけていた。

彼女は口裂け女。二人の上司に当たる人物であり、八尺様に新たな企画を作るように指示した張本人であった。

「私たちは都市伝説として、この鹿島乳業で日々人々を怖がらせている。その恐怖を集めることで、上質のマーガリンを作るのが私たちの仕事だ」

「人の恐怖から作るマーガリンってもう響きがヤバいっすよね。未だに慣れねえんだよな、俺。石油が原料って方がまだリアリティあるっす」

「それはいい加減慣れろ。この会社に入って何年になる」

「さあ、何年でしたっけ。長すぎて覚えてないっすね」

「まあいい、それで、だ。そろそろ我々も新たな企画を立てなくては、という話になっているんだよ、くねくね」

「なんでまた？ 今だって世界中にあるんですよ、都市伝説って。子供だって少子化問題はあっても大量に生まれてる。それだけで十分利益は上げられてると思うんすけどね」

「残念ながら、それでも上の要望には応えられていないのが現状だ。ネットが普及し、テレビや映画が一般的になった今の世の中、情報を広める手段だけは多量にそろっている。だがしかし、そのせいで怖がらない子供も増えた。大人なぞ皆我々をバカにするが、私が現役の頃なんか、社会現象にまで発展させたんだぞ。親までが恐れる世の中だった」

「その話は酒の席で散々聞かされたんでもういいっす」

「む……こほん。そこで、だ。営業班も成果をさっぱり上げられない状況にある今、社内に新しい風を、ということを上から言われてしまったんだ」

「はあ……」

「で、お前たちは次の外回り担当だろう？」

「えっ、次でしたっけ」

「次だぞ。ちゃんと予定表を見ておけと言っただろう」

「そろそろだとは思ってたけど、うえー、七月っすか」

「正確には七月の終わりから八月の半ばまでだな。お盆過ぎぐらいか」

「うわあ、稼ぎ時……」

「その稼ぎ時にドカツ、と稼げる新企画を、お前たちには考えてもらうことにした」

「えっ、それ、つまり、俺も、ってことっすか？」

くねくねが自らを指さして聞けば、口裂け女はにっこりと笑って頷いた。

「お前たち白色コンビには期待してるぞ。白くて少年を狙った実績が似てるからと組ませたが、何気に相性も悪くないみたいだしな」

口裂け女の一言に、八尺様が照れた様子で「えへへ」と後頭部を軽く搔く。

その横で、くねくねは何とも言えない表情を浮かべていた。

「俺、こういうの考えんの苦手なんすけど……」

「どうせお前は外に行ったとしても腰を振って突っ立って、相手が見てくるの待ってるだけだろう。少しは頭を回してみろ。勉強になるぞ」

「うへえ……厳しいっすね姉さん」

「先輩、私も頑張りますから、一緒に考えましょ！」

横から笑顔で言ってくる八尺様に、くねくねは少しの間を置いて、ため息を返した。

「姉さん、これ、企画書作って出せばいいんですか？」

「プレゼンしてくれるとなお良いな。今日の昼までに仮でも案を立ててくれ。正式案はその後でいい」

「急かしますねまた……」

「恐怖話も鮮度が大事な。一度聞けばオチを知ってしまって素直に楽しめなくなる。だからこそ、斬新かつオチが読めないものを用意してくれ」

「はあ……」

「我々の会社も最盛期ほどではないものの、細々と続いている以上、利益を上げなくてはならない。実益のために商品売るのは当然だが、そのためには元手が必要だ。分かっているな？」

「分かってますよ……そのためにも人の恐怖心を集めてこいってことなんでしょう？」

「そうだ。今まで以上に効率良く、人の恐怖心を煽り、逆なで、恐怖を手に入れることができるのか。それによって今年や来年の製品の質だって変わってくるんだぞ」

「口裂け先輩が全盛期の頃はすごかったらしいですねー」

「ああ、いたるところで引っ張りだこだった。新聞にも載ったぐらいだからな」

「姉さんはホントにトップクラスっすからねえ……俺らも上質のマーガリン作るのに頑張らないとな、八尺」

「はい！」

「うむ、その意気だ。古紙を適当に使っていいから、それをホワイトボードとかノートの

代わりに頑張ってくれ。では、頼んだぞ」

そう言って、口裂け女は二人から離れて行った。

冷房の効いたオフィス内で、その気温の変化とは関係なしに、くねくねは冷や汗をかいてしまう。

「参ったな……マジで苦手なんだが、こういうの」

適当にコピーミスした書類などが投げ込まれた古紙回収ボックスから何枚かいただいてきて、ボールペンを片手にくねくねは机に向かった。

横では相変わらず、八尺様がうんうん頭を捻っている。

「おい八尺、お前何か良い案思いついたりしてないのか？」

「思いついてたらうんうん言ったりしてません」

「だよなー……姉さんも人使いが荒いつつーか、なんつーか」

「人じゃないですけどね、私たち——痛っ」

うふふ、と笑う彼女を見て、くねくねはスパン、と軽くその頭を叩いてから続けた。

「んで、俺たちが考えないといけないのは、新しい怖がらせ方、か。お前は古典的なものから何かしらヒントを得ようとしてた、と」

机の上にある、すでに何がしか書いていた八尺様の紙を見ながら、くねくねはめんどくさそうにしていた。

叩かれた頭を押さえながら、八尺様は涙目で答える。

「は、はい……」

八尺様の書いてた紙の横に自分の持ってきた紙束から一枚取り出して、くねくねはサラサラと何かを書き始める。

「昔ながらの手法から得られる情報で大切なのはな、どんなことをしていたのか、ということじゃねえんだ。重要なのはそれじゃない。大事なのは、なんでそんなことをしていたのか、その効果によってどんな影響があったのか、どうしてそれが効果的だとされて行われていたのか、ということだ」

「な、なるほど……」

真面目に言うくねくねに、八尺様はすぐ横にぴったりくっついてくねくねの手元を見つめながらこくこく頷く。彼女の方を一瞬チラッと見てから、くねくねはさらに言う。

「たとえばここに書いてあるこんにやく。これは肝試しでよく使われていた人間たちの手法を、俺らが逆輸入した感じだな。濡れた手で触られたかのような感触の演出、突然どこからともなく触られることによる恐怖、ひんやりとした肌触りに怯える人間は多かったようだ」

「ふむふむ」

「水ってのは古来から恐怖現象につきものでな。実際、幽霊系の連中は水場が大好きだろ？」

「ああ、確かに。水回りに出没すると人間ビビリやすいからいい、って言ってました！」

「それな、水が滴る音とかに人間がすぐビビるからなんだよ。人間ってのは普段しない音だの感触に敏感だ。だから『痛み』からも恐怖が生まれるっつーわけだよ。俺たちは直接危害を加えるタイプではないからあんま参考にできなさそうだけどな」

「そうですね……直接痛みを与えるのは口裂け先輩とかの仕事ですもんね」

『痛み→×』と紙に書き込んでいき、くねくねはめんどくさそうに呟く。

「かと言って、俺らの場合自分から見せに行くのはなんとも違う。というか、俺らの場合は見られたらむしろマイナスだろ？ 被害を出す場合を除いて」

「そうですね……私たちは、牛の首先輩なんかと同じですからね、基本的には」

「そう。実態を掴まれちゃいけない。『そういう出来事があった』ってのを知られることで恐怖を煽り、そこから恐怖心をいただくのが俺たちのタイプがやるべき怖がらせ方ってわけだ」

『実態を知られてはいけない』と書き込んで、くねくねは腕を組み、難しい顔をした。

「実態を知られない、ってなると……遠目で見られて噂が流れるのを待つ、サクラを用意して噂を流す、あとは、実行時に顔とか外見を隠す、ってところか」

「最後のは、別人のように成りすまして頑張る、ってことですか？」

「だいたいそういうことだな」

「それなら私、得意ですよ！ 声真似には自信があります！」

そう言うと、八尺様はんん、うん、うん、と何度か咳払いをした後、あ、あ一、と声の調子を整え始めた。少しして、得意げに声を出す。

『馬鹿言ってるじゃねえぞ八尺！』……先輩の真似です。似てました？」

隣で聞いてたくねくねは、思った以上のそのクオリティに驚き、啞然とした顔で八尺様の方を見つめていた。

「お前、妙な特技持ってんな……いやでもそれは使える。すごいぞ八尺」

「えへへー、これだけは昔から自信あるんですよー。先輩は何か特技みたいなものないんですか？」

「あん？ 特技？」

『八尺→得意技「声真似」』と書き込みながら、くねくねは微妙な顔をしていた。

特技、特技か。

「一応あるにはあるぞ。特技っつーか、趣味っつーかだけど」

「どんなのですか？」

「ダンスだ。昔から趣味でよくやってたんだが、今でも好きだぞ」

「ダンスですかー。今ここで簡単に踊ることができます？」

「スペース足りないだろ……」

周囲を見回して、つい立と机と座っている二人の椅子でみっちみちのスペースにため息をつく。この状態ではダンスを踊るところか、身振り手振りですらも難しい。

「さすがに実演は無理だな、ああでも、確か動画なら……」

くねくねはスマートフォンを取り出し、操作してその動画とやらを画面に映すと、二人で見れるように机の上に置いた。

「あっ、これ、先輩の家の近所ですか？」

「ああ。何もねえ場所だよ」

画面に映っているのは、周囲に広がる田んぼと、のどかな田舎風景。砂利の敷き詰められた道路のど真ん中で、一際目立つ真っ白なジャージ姿のくねくねは、カメラの方をじっと見つめながら語りだした。

「お前ら一、いい感じに映ってるよなー？」

「くねくねさんかっこいいー！」

幼女の声が入り込んできて、八尺様が少し訝しむような視線をくねくねの方に向けろ。くねくね本人は画面をまっすぐ見つめたまま、少しだけ恥ずかしそうに答えた。

「近所の子供たちだっつの。ほら、始まるぞ、俺のダンス」

彼の言葉に合わせたように、スマートフォンから軽快な音楽が流れ始める。

リズムカルで陽気な音楽に合わせてるように、リズムを取って行く画面内のくねくね。足で何度か地面を叩き、テンポを確認していく。

「さあ、行くぜ！」

画面内の彼が叫んだのと同時、八尺様は真顔で画面を見つめていた。

くねくねは、自分が踊っている姿を改めて見るのが恥ずかしいのか、画面から顔を逸らしていた。すぐ横の八尺様が固まっていることにも気付いていない。

何しろ、画面内のくねくねはダンス、と呼べるか怪しい動きをひたすら繰り返しているだけだったのだから。

リズムに合わせて、腰を前後に。

リズムカルに、キレッキレの動きで、前に、後ろに、腰を振る。

ズンツ、ズンツ、と打楽器の振動が響くたび、彼の腰がクイツ、クイツ、と勢いよく動かされていく。

「いいよーくねくねさーん！」

画面内から聞こえてくる幼女たちの声は、どう聞いても半笑いのそれだ。確実にからかっている。

だがしかし、言われている本人はまんざらでもない様子で、とてもよい顔で何度も何度も腰を振り続けていた。

腰を動かす度、彼の頬を伝って汗が飛び、キラキラと太陽の光を浴びて輝いていた。

しかし、動きそのものは……

「先輩、止めていいですか、これ」

「ん、おお、もういいな。どうだ？俺のダンスは」

「……とつても怖いなあ、って思いました」

「怖い？ まあ、動きのキレが素人とは違うからな！」

そういうことじゃないんですよ、とは言い出せないのが、後輩としての優しさというか、なんというか。

八尺様は生暖かい笑みを浮かべ、照れながらスマホを仕舞うくねくねを優しい目で見つめていた。

くねくねは、『くねくね→ダンス』と紙に書き込んで、持っていた鉛筆の後ろ側を側頭部に押し当てた。

「んー、しかし、ダンスと声真似じゃ、ちょっと難しいよな……」

「まあ、恐怖心を煽りたいだけならできなくもないでしょうけど……なんというか、怪談らしくはないですよ」

実際、先輩が一人で踊ってればそれだけで恐ろしい気がするような気もしますが、とは口に出せない八尺様。

くねくねは再度くねくねは腕組みをして、うーむ、と唸り声を上げた。

「まあ、俺の恐ろしいところは『訳の分からなさ』だからな。仕方がないっちゃ仕方がないとは思いが……」

「そうですねえ……でも先輩」

「あん？」

「私、気付いちやったんですけど……」

「なんだよ」

「この調子でいくと、新しい都市伝説を作ることになりませんか？ 私らの手柄とはまた別になってくるんじゃないですかね、これだと」

少し怯えた様子で言う八尺様に、くねくねは黙って彼女見つめた。

ぱちぱちと瞬きを繰り返しながら、くねくねは八尺様の方をじっと見ながら、ゆっくりと手を振り上げて、八尺様の頭に軽くチョップを繰り返すと、ばしばし何度も叩きつけながら叫び始めた。

「そうだよそうになっちゃうよ！ 今さら気付いたわ俺のアホがー！」

「先輩！ 痛い、痛い！ 痛い、です、あ痛っ！」

「おいおいおいおい、このままだと口裂け姉さんにどやされんぞ！ 今の時間は？」

チョップする手を止めて、くねくねがスマートフォンで時間を確認してみれば、すでに時刻は十一時。タイムリミットまで残り一時間しか残っていない。

「くっそ、無駄な時間過ごしちゃったじゃねえか！ どうする八尺！」

「どうする、って言われましても……」

涙目で自分の頭を押さえる八尺様は、困った様子でおずおずと言った。

「このままだと新しい都市伝説を作るだけになるので、私たちがここまで考えてきたことを元に、自分たちの話に取り入れられそうな要素を考えたらいいんじゃないでしょうか……」

それに、パチン、と指を鳴らしてくねくねは頷く。

「それだ！ 冴えてるな八尺！ 俺のチョップが脳神経を刺激したか！」

「たぶん関係ないと思いま、あ痛！」

苦笑いを浮かべた八尺様の頭を、くねくねはもう一度チョップして、ぶつぶつと独り言を始める。

「そうだ、ここまで言ってきたことは無駄じゃない。先人の知恵を借りるってのは、俺たちのこれからのためにこの情報を取り入れていくってことなんだ。だから全ては活かさないかもしれないけど、全てが無駄というわけではない。俺たちがこれらの情報の中から取り出して、これからの活動に上手く取り入れることができさえすれば、新鮮、かつ、斬新な企画が出来上がるのではないだろうか？ きっとできる。俺たちならばやれる。八尺、紙と鉛筆、大量に借りてこい！」

「はっ、はい！」

八尺様は、勢いよく叫んだくねくねの声に反応するように慌ててつい立の間隙をぬって飛び出した。

その後ろ姿を見送ってから、くねくねは机の上の紙にガリガリと鉛筆を叩きつけるかのように押し当て、様々な単語を書いていく。

「都市伝説に大切なのは訳が分からないもの、そう、意味不明な恐怖だ。よく分からないけど怖い、俺や八尺はまさにその典型だった。八尺は土着信仰の名残みみたいな雰囲気漂わせて怖さに説得力を出してやがるが……くそっ、よく考えられてんな、八尺の話！ ってそれどころじゃねえ、俺は今自分のことを考えるべきだ。俺様の都市伝説だってけっこうメジャーどこなんだぜ……人に見られるだけで相手が狂っちゃう、そういうもんだ。恐ろしい、我ながら恐ろしい都市伝説だぜ……！ だが、もう今はそれだけじゃ怖がってもらえねえ。何か、もっと追加で恐ろしいもんをくつつけるべきなんだ。口裂け姉さんはその外見だけでなく、その後殺すだのなんなのってのが付いてくる。花子さんは赤いちゃんちゃんこのような具合の後付けだってくるんだ、トイレに誰もいないはずなのに声がするっただけで恐ろしいのによ！ 俺にはそういうのがあまり思い当たらない……そう、さらなる恐怖、さらなる恐ろしさを追及しねえといけねえんだ……！」

「せ、先輩、紙と鉛筆、もらってきましたあー！」

「でかした八尺！ そしてお前も考えろ、俺様の新たな恐怖を！」

「えっ、先輩、私のは……？」

「知らん、後回しだ！ 終わったらお前のも考えてやっから、今は俺を手伝え！」

「は、はい！」

八尺様はくねくねのすぐ横に座り、くねくねが紙の上に書き出していた様々な単語を見つめた。

「後付け効果、ですか」

「そうだ。口裂け姉さんの口が裂けてる女であることプラス相手を殺す、みてえな感じ

だな」

「それならくねくね先輩は、白くてくねくね動いてる何かがいて気持ち悪いのに見たら狂う、ってもうあるんじゃないですか？」

「バカ野郎、最初の白い何かってだけだと別に怖くねえだろ。俺の恐怖はあとの狂うって部分がかっついて、初めてそのくねくね動いてる俺様が怖く見えるんだよ。後付けなんじゃなくて、後から怖さがくるタイプなんだよ」

「はあ……」

「だからな、その後に追加で何かがあるのがいいんだ。ただ俺様は困ったことに自分から何かするタイプじゃねえ。そいつをどうするかっつーのがな……」

「だったらもういっそ、型を破りましょう」

「は？」

「襲っちゃいましょう、自分から。くねくね先輩の踊りならいけます」

グッ、とガッツポーズして見せる八尺様に、くねくねは照れ笑いを浮かべた。

「おいおいそんな褒めんじゃねーよ……いやでも、そうか、下手に型にとらわれていては、新しいもんは作れねえもんな」

「そ、そうですよ先輩！ 様式美というのは大切です。例えば私が少年を狙うのはとても重要なことです。こればかりは絶対に外せない、物語の中核とも言えるような部分です。先輩も同じ少年を狙う都市伝説なら分かってくれますね？」

「いや別に俺は少年限定で襲うってことは……」

「大切なことなんです。この世の少年たちの悲鳴、恐れている顔、シャイだから私には決して直接会おうとはしてくれないあの子たち……ぽぽぽぽ……と、失礼、すみません、取り乱してしまいました」

呆けた顔を正しつつ、口元から垂れていた涎を拭いながら、八尺様は続ける。

「とにかく、様式美は大切なことです。しかし、そればかりにとられる、そう、まさに先輩が言っていたような、型にとらわれていては、というものもあるんです。絶対に昔ながらの手法が大切か、自分の都市伝説に忠実なのが一番大切なのか、というのは疑問に思います。もういっそ、新たな都市伝説としても働けるように、ぐらいいい感じでも良いのではないのでしょうか！」

「そうか……そうか、その手があったな！ 元々の俺たちの仕事だけじゃなく、それ以外の都市伝説としての仕事も手に入れればいいんじゃないか！ そうだそうだ、別に新しい都市伝説を生み出そうが関係ねえ、良い企画は通してくれるのが姉さんだぜ！ そうと決まれば八尺、俺とお前の特技を組み合わせた何かを考えるぞ！」

「はい！」

その後、八尺様とくねくねはひたすら鉛筆を走らせた。

八尺様が持ってきた大量の紙は、一枚、一枚と文字の羅列に埋め尽くされていく。ああでもない、こうでもない、試行錯誤の繰り返し。次から次へと紙を使い尽くし、文

字の羅列が大量に並べられた紙が増えに増えていく。そんなことを続けるうちに時間は少しずつ進んでいき、やがて、タイムリミットの五分前。

「これだ……これなら、姉さんだって納得してくれるはずだ！ なあ八尺！」

「ええ、これならきっと、口裂けさんだって納得してくださるはずです！」

二人はついに一つの企画を作りあげた。

疲れ切った表情で額に汗を浮かべながらも、その企画書と呼ぶにはお粗末な、しかし二人の努力の結晶である紙を見つめ、彼らは清々しい表情を浮かべていた。

「さてお前たち、企画はできたのかな？」

と、ちょうどその時、背後から口裂け女の声が聞こえてきた。

振り向きながら、くねくねと八尺様はとても良い笑顔で頷く。

「はい、素晴らしいのができました！」

「姉さんも驚いて口がさらに裂けちまうかもっすよ！」

「ほう、それは楽しみだな。どれどれ……」

口裂け女は二人が差し向けてきた企画書を読んでいく。

「ふむ、『恐怖！ 迫る踊りと響く声』？」

「コンセプトは俺の踊りと八尺の声真似を使った意味不明さの押し売りっす。正体不明の白い何かが、響く声と共に踊り狂いながら迫ってくる恐怖！ 廊下で実演するんで、ぜひ見てってくださいよ！」

「あ、ああ……」

なんとなく、タイトルから微妙に嫌な予感がしながらも、二人の輝く笑顔に口裂け女は苦笑いで頷くことしかできなかった。

そして、彼らに連れられて出てきた廊下で、口裂け女は不安のに思いながら二人を見守る。目の前で、くねくねは廊下の一番端、口裂け女から見て奥の方にまで進み、八尺様は廊下の途中にあるエレベータの乗り場、廊下の一部がへこんだような場所に隠れるように歩いて行った。

「では姉さん、いきますよ！」

くねくねそう言った瞬間、廊下に薄く、しかしよく響く暗い声が少しずつ聞こえてきた。

ぶつぶつと何かを口にしているその言葉。それが少しずつ大きくなるにつれて、口裂け女の目に入っていたくねくねがリズムカルに腰を振りながら迫ってきた。少しずつ、少しずつ、じりじりと距離を詰めてくる彼と共に、大きくなっていく低い声。

得体のしれない白い何かが、狂ったように腰を前後させつつ迫ってくる姿はなかなか不気味だ。その上その踊りはどこからともなく聞こえてくる暗く低い声によって不気味さを上乘せされている。その声はよどみなく続き、そしてそのリズムに合わせて踊っているらしいくねくねが近づくにつれて、口裂け女は無意識に、自分の脚を半歩下げていることに気が付いた。

やがて、すぐ近くにまで来たくねくねが、息を切らせながら口裂け女に向かってとて

も良い笑顔で聞く。

「どうですか姉さん、これが俺たちの新しい企画です！ 怖いでしょ！」

はあ、はあ、と激しく息を切らせながらなおも踊り続けるくねくねと、エレベーター乗り場の方からこちらに期待を込めた目を向けてくる八尺様を見て、口裂け女は少しの間を開けてから、ため息をついて頭を抱えた。

「ああ、怖い。お前たちの発想が恐ろしいよ……」

それを聞いて、八尺様は隠れていた場所から出てきて、くねくねの方に駆け寄ってきた。

「先輩、やりましたね！」

やっと動きを止めたくねくねも、にっこりと笑って彼女に答える。

「ああ、これでこの夏はいただきだぜ！ じゃあ姉さん、後でこれはきちんとした企画書にしてまた提出しますね！」

それを聞き、口裂け女は静かに呟く。

「いや、却下だ」

「へっ？」

不思議そうに顔を見つめてくる二人に、口裂け女は呆れ顔を怒り顔に変化させながら、怒鳴り声を上げた。

「夏の暑さにあられたかこのアホ共が！ お前らのそれは確かに得体の知れない恐怖かもしれないが、変質者のそれだろうが！ 怪談として怖がらせる努力をしろ！ 作り直し！」

「ええー！ 姉さん、俺ら頑張ったのに……」

「努力の方向を間違えた結果だ。今日中でいいから、それらしい企画を立て直せ。いいな！ 私は昼ご飯に行ってくる！」

そう言って、口裂け女は廊下を歩いて行ってしまった。

残されたくねくねと八尺様は顔を見合わせる。

「どうしましょう、先輩」

八尺様が困った顔で聞くものの、くねくねは無言のままムスツとした顔で、八尺様の肩を叩いた。

「痛っ！」

「……飯、行くぞ」

「えっ、あっ、はい！」

二人は連れ立って近所のファミレスに入る。向かい合って座り、適当にハンバーグセットを二つ注文。そして、くねくねは静かに口を開いた。

「まさか、あそこまで即座に却下されるとはな……」

それなりにへこんでいる様子の彼を見て、八尺様はおろおろと、励ますように言う。「せ、先輩、大丈夫です！ 口裂けさんだって、きっと努力は認めてくれているはずで

すよ！ ほら、午後もあるんですから、そっちで挽回すればいいんですよ！ ね！」

「八尺……」

「私も頑張っているいろいろ考えますから！ とりあえずご飯食べて元気出しましょう！

落ち込んでるなんて、先輩らしくないですよ！」

「……そうだな」

そうこうしているうちにお昼を食べて、二人は会社へと戻った。

オフィスへと入る直前、

「あ痛っ！ ……先輩？」

唐突にくねくねは八尺様の肩を軽く叩いた。不思議そうに見てくる彼女と視線を合わせるこ

となく、くねくねは小さく呟く。

「……ちょっと元気出たわ。ありがとよ」

しかし、彼女には聞こえていないのか、八尺様は首を傾げる。

その様子を見てもう一度叩きながら、くねくねは元気に言った。

「うっし、さっきの分を挽回するぐらい、頑張ろうじゃねえか！ 紙もらってこい八尺！」

「は、はいっ！」

八尺様はぱたぱたと駆け出して行き、くねくねはさっきまで座っていた椅子に腰かけた。

その後、元気になった二人がさらに珍妙な案をいくつも作ってきたことで、口裂け女がまた頭を抱えることになるのだが……二人の元気な様子を見る上司が、自分のそんな未来を知るのはしばらく後のことである。

Copyright(C) Jikei Group. All Right Reserved.

当サイトに掲載されている全ての画像・文章の無断転載・転用を禁止します。